

# 多治見市文化財保護センター企画展

## 高田陶祖 400 年記念 高田焼の歩み

### ◇ はじめに

2016 年は、高田の陶祖加藤<sup>かげなお</sup>与左衛門景直が元和 2 (1616) 年に当地で窯を開いて 400 年目にあたる年です。その記念すべき年に、高田陶磁器工業協同組合と連携して本展を開催することとなりました。

当地域の歴史は古く、高田は京都臨川寺の寺領目録 (1332 年) に「美濃国高田勅旨」として、小名田は永保寺寺領目録 (1383 年) に「於奈田村」としてそれぞれ文献に登場します。それ以前からは庶民の器である山<sup>やま</sup>茶碗<sup>ちやわん</sup>が大量に生産され、茶陶文化が花開く安土・桃山時代には、小名田で桃山陶を代表する白天目茶碗や瀬戸黒茶碗がいち早く焼かれるなど、やきもの生産の中心地のひとつでした。また、当地を語る上で外すことのできないのが、高田の白粉<sup>しろこ</sup>地域から産出する青土 (白粉土) という陶土です。この青土の特性を最大限に引き出して、江戸時代中期からは、高田焼の代名詞となる徳利が江戸を中心に爆発的な売れ行きを見せます。近代以降は、汽車土瓶や湯たんぼ、鶏<sup>とりのみずのみ</sup>水呑などの土味を活かした生活雑器を、時代の需要に応えながら現代まで作り続けています。

美濃窯のほとんどの地域では、19 世紀に入ると磁器の生産に転換していきます。しかし、高田・小名田地域は、青土を活かした素朴なやきものを作り続ける道を選択し、美濃窯の中でも独自の窯業文化を培ってきました。本展では、400 年以上に互<sup>わた</sup>って地元から産出する青土と共に歩んできた歴史を振り返り、今後の高田焼の発展に繋がるものになればと思います。

# 1. 高田・小名田の歴史的環境

土岐川以北の地域（多治見市・可児市・土岐市）は良質な粘土に恵まれ、古代より窯業生産地として知られてきました。この地域には、土岐川陶土層という粘土を含んだ層が所々に堆積しています。高田の白粉という地域からは、この層に埋蔵する木節粘土の一種である青土（白粉土）が産出します。この青土は、その原料のみでやきもの作りに使用できる陶土で、成形しやすく、焼成後は固く焼き締め液体を入れる容器に適しているなど、非常に優れた性質を持っています。そのため、高田では昭和 40 年代まで他地域へ青土を持ち出すことを厳しく制限し、大切に使い続けてきました。高田のやきもの作りの長い歴史は、この青土と共に歩んできたと言っても過言ではありません。

また、高田の地名の由来は古代に始まります。現在の高田を含む土岐市・瑞浪市は、当時勅旨によって開墾された皇室領の高田勅旨田でした。この広大な勅旨田の中で、唯一その名を残したのが「高田」でした。一方、小名田は永保寺寺領目録に「於奈田村」と記載されており、古くから歴史のある地域です。

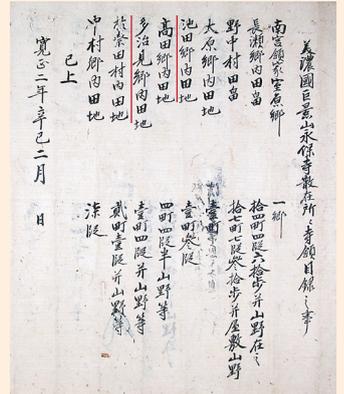


◀昭和初期 ▲現在  
高田の粘土採掘風景



▲青土

▶永保寺寺領目録 寛正2（1461）年  
（多治見市図書館郷土資料室所蔵）

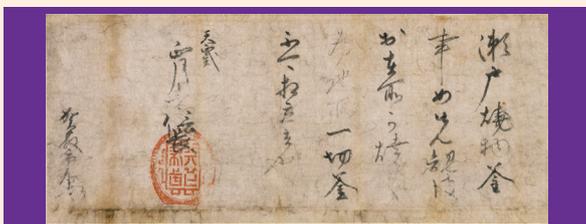


# 2. 美濃陶祖から高田陶祖への系譜

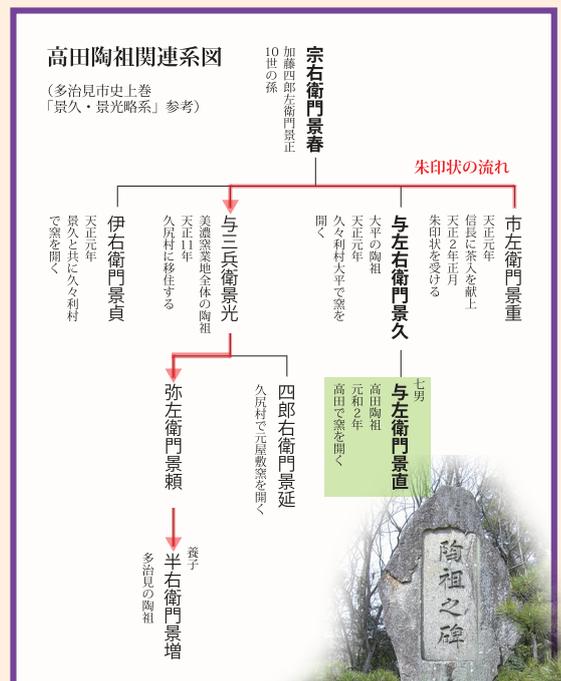
窯業の盛んな地域では、やきもの作りをその土地へ伝え広めた人物を「陶祖」とし、その偉業を讃えています。高田の陶祖は、加藤と左衛門景直です。景直の祖父は、瀬戸の陶祖加藤四郎左衛門景正 10 世の孫景春です。景正は、鎌倉時代に曹洞宗を伝えた道元と共に宋（現中国）へ渡り、やきもの作りを学びました。その後帰国し、瀬戸の地でやきもの作りを興隆させたため、瀬戸の陶工たちは、景正何世と名乗り景正を陶祖として讃えています。

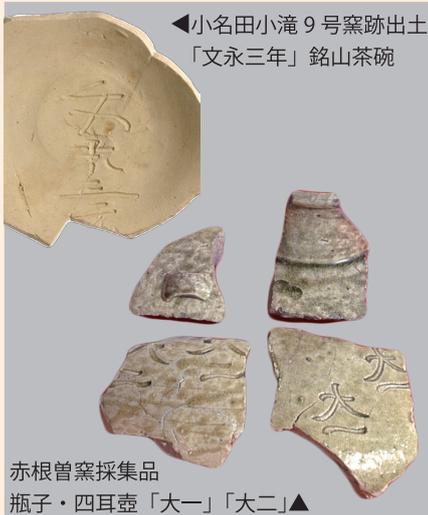
高田の陶祖以外にも美濃の陶祖は皆、この景正 10 世の孫景春から始まっています。景春には、織田信長に茶入を献上し朱印状を授かった景重、瀬戸から久々利村大平（現可児市）に移って窯を開いた景久、兄の景重から朱印状を受けて瀬戸から久尻村（現土岐市）に移った景光らの子供がいます。景光の子供たちは、美濃の各地で窯を開き陶祖となっています。景直もその内のひとりであり、元和 2（1616）年に大平より高田に移って窯を開き、それ以降高田のやきもの作りが盛んになったと言われています。

景光が朱印状を譲り受けて美濃の地へ来た安土・桃山時代には、多くの瀬戸の陶工が良い土を求めて美濃へ移り各地で窯を開きました。しかし、在地の農民からは山や田畑を荒らされると反対されます。この時威力を持つものが、新たに窯を築くことや原料となる粘土の採掘などを許可する信長からの免許状や朱印状でした。景久は免許状を持ち、景光は景重から譲り受けた朱印状を持つことによって、美濃の地で自由にやきものを作ることができました。そのため免許状や朱印状は、陶工たちにとって家系の由緒や窯焼きとしての正統性を示す重要な証となりました。



◀信長朱印状





### 3. 陶祖開窯以前の高田のやきもの

高田・小名田地域では、陶祖景直開窯以前の 13 世紀からやきもの生産が始まっていた。庶民の器として東海地方を中心に生産された<sup>やまぢやわん</sup>山茶碗という無釉のやきものです。燃料となる薪が周辺の山々にあり、原料となる粘土も近くから産出するため、盛んに焼かれていました。小名田<sup>こたき</sup>小滝 9 号窯跡からは、山茶碗最盛期を物語る貴重な資料となる文永 3 (1266) 年銘の山茶碗片が出土しました。また赤根<sup>あかねそ</sup>曾古窯跡群 (長瀬町) からは、「大一」「大二」の銘が入った灰釉の瓶子や四耳壺などが採集されています。この「大一」「大二」の銘は、伊勢神宮へ供え物を運ぶ際のノボりに記された例もあり、当時この地域は、伊勢神宮領である池田御厨<sup>いけだみくりや</sup>の内であったため、献上品として特別に焼かれた可能性があります。

15 世紀の末頃になると、これまでの<sup>あながま</sup>窖窯 (地下式) から<sup>おおがま</sup>大窯 (地上式) へ窯の構造が大きく変化します。この画期的な窯により、小名田<sup>かました</sup>の窯下窯では、尾張徳川家の所蔵として知られる<sup>あまがね</sup>白天目茶碗を、<sup>あまがね</sup>尼ヶ根窯では瀬戸黒茶碗が焼かれるなど桃山陶を代表するやきものがいち早く生産されています。



尼ヶ根窯採集品 瀬戸黒茶碗 (個人蔵)▲

### 4. 開窯後の高田のやきもの

高田・小名田地域では、<sup>あまがね</sup>尼ヶ根窯以降大窯による生産が中断されていたと考えられますが、他の地域では、盛んに生産が行われていました。慶長 12 (1607) 年頃には九州の唐津から<sup>れんぼうしき</sup>連房式登り窯が<sup>もとやしき</sup>久尻の元屋敷窯 (現土岐市) に導入され、織部などを生産し始めました。これまでの大窯は、製品を焼く部屋が 1 室でしたが、連房式登り窯は、この部屋がいくつも繋がっているため、熱効率も良く一度に多くの製品を焼くことができました。

慶長 18 (1613) 年、小名田の陶祖となる加藤伊右衛門景門が大平から移住し窯下 3 号窯でやきもの作りを始め、小名田可児郷窯にも関わったと思われま。次いで元和 2 (1616) 年に景直が高田の地へやって来て、高田神社窯を元和年間に築きました。それからは近くで産出する青土を使って、徳利や土瓶などの日用雑器を始め、磁器への転換期に作られた<sup>せつき</sup>染付の<sup>かげかど</sup>炆器も生産しました。

磁器の生産は、美濃では文化・文政期の 19 世紀初めになって開始されます。高田でも、需要の高い磁器生産を試みた痕跡が窺えます。しかし、当時江戸では飲酒文化が花開き、高田の誇る青土で作った徳利が爆発的に売られていました。また磁器を作るには、適した原料を遠くから運んだり、専用の窯が必要になるため、高田では本格的な磁器生産には至らなかったようです。

### 5. 高田徳利

<sup>あまがね</sup>尼ヶ根窯から出土した鉄釉徳利 (16 世紀) が最も古いものですが、美濃では江戸時代以前より高田・小名田以外の地域でも徳利の生産が行われていました。江戸時代中期になると、大都市で酒の需要が増えて庶民も酒を嗜むようになり、それに伴って酒屋が客に酒を貸し付ける容器として「通い徳利」が大量に使われるようになります。灰釉の白い釉やあめ釉、錆釉の徳利が、高田の他多治見村や笠原村、市之倉などの決められた地域で焼かれていましたが、特に青土を産出する高田・小名田の徳利は質が良い上に、小名田村の領主旗本馬場氏を通して、江戸で大量に販売されるようになります。



▲小名田可児郷窯 水注



▲高田神社窯採集品  
蘭竹皿



▲共栄小学校採集品  
炆器染付筒形湯呑



その当時の徳利は、灰釉を掛けただけの無文で出荷され、江戸で釘状の工具によって屋号などを彫り付けていました。幕末になると窯屋で生の生地に屋号や地名などを彫り入れてから焼成するようになり、明治時代に入るとようやく現在知られる鉄絵具や呉須で屋号や住所を筆書きした徳利が登場し、「高田徳利」と呼ばれるようになりました。



▲高田大ザヤ窯跡出土  
江戸時代の灰釉徳利



▲高田大ザヤ窯跡出土  
近代の高田徳利（並徳利）



成瀬教三氏は、高田徳利の正確な成形技術を長年の経験により身に付け、昭和56年に市の無形文化財に指定されました。最盛期には、1日に二升徳利を約200本成形しました。

▲昭和33年 徳利を挽く成瀬氏  
(多治見市図書館郷土資料室提供)

## 6. 近代～現代の高田焼

好調だった徳利の生産も、昭和の初期に登場したガラス製一升瓶の普及により需要が激減しました。このガラス瓶に対抗するため、昭和7（1932）年に高田工業組合は「高田焼製品改良研究会」を発足させ、様々な製品開発に取り組みます。高田では、窯屋ごとに汽車土瓶や網足、蒲鉾型湯たんぼ、鶏水呑など、青土の性質を最大限に活かした数多くの製品を次々と生み出していきます。また、青土は石膏型を利用した鑄込み（ガバ鑄込み）成形にも適しており、これによって規格の揃った製品を大量に生産することが可能となりました。



◀ガラス瓶に対抗した  
陶製の瓶形容器

高田大ザヤ窯跡出土▶  
左から鶏水呑、汽車土瓶



高田神社窯採集品 蒲鉾形湯たんぼ▲

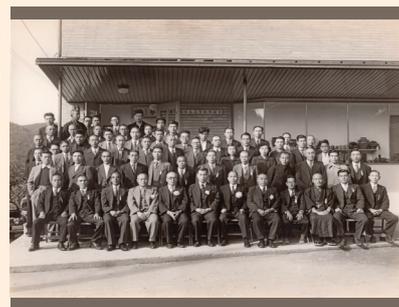
昭和22（1947）年に高田・小名田で高田陶磁器工業協同組合が設立され、昭和24（1949）年に両地域が協議して組合管内の陶祖を景直と定め、今日までその功績を讃え伝えています。

## ◇ おわりに

高田焼の特徴は、青土の性質を利用しながら、常に時代のニーズに沿った製品作りを行っている点にあります。高田・小名田地域は、家族経営の小規模企業が多いため柔軟な対応が可能であり、現在に至るまでの様々な商品開発に繋がっています。

（編集 黒田祐規子）

▶組合設立当時の集合写真  
（高田陶磁器工業協同組合所蔵）



## 主要参考文献

- 多治見市 1980 『多治見市史』 通史編（上）
- 多治見市 1987 『多治見市史』 通史編（下）
- 岩井美和 2009 『美濃焼産地の陶磁器製造—岐阜県多治見市共栄地区の地域動態の分析—』 名古屋大学大学院提出修士論文
- 春日美海 2014 『高田徳利 ～高田の窯屋と小名田の商人～』（多治見市文化財保護センター企画展パンフレット）
- 春日美海 2014 『美濃窯における近代高田徳利終末期の様相—徳利販売商人の記録から—』
- 高田陶磁器工業協同組合 1994 『高田焼産地の拠点づくり—新たな協同事業の開拓—』
- 高田陶磁器工業協同組合 2016 『高田焼 四百年のあゆみ』
- 多治見市文化財保護センター 1999 『高田大ザヤ古窯跡群発掘調査報告書—多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書 第63号—』

謝辞

青山双溪氏、加藤景嗣氏、高田陶磁器工業協同組合、多治見市図書館郷土資料室

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット  
「高田陶祖 400 年記念 ～高田焼の歩み～」

- 展示期間・場所  
平成28年3月22日（火）～平成28年8月26日（金）  
多治見市文化財保護センター展示室
- 発行  
多治見市教育委員会・文化財保護センター  
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26  
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033  
URL <http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>
- 発行部数 1,200部（印刷費用18,480円）

※環境に配慮した紙を使用しています。